

| | | |
|-----------|--------------------|--|
| 1 | 審議会名 | 市民による事業評価(高齢者施策 第4回) |
| 2 | 日 時 | 平成25年6月28日(金) 午前9時30分から午前11時30分まで |
| 3 | 会 場 | ひとまちげんき・健康プラザうえだ 第1会議室 |
| 4 | 出席者 | 山浦健太郎T L、大谷直史S T L、井上妙子委員、圓増治之委員 神尾みち子委員、柴崎琢磨委員、杉崎千代委員、中山昭雄委員 堀内吉孝委員、宮島かつ子委員、山田 豊委員、山野井悦雄委員 |
| 5 | 市側出席者 | 徳永高齢者介護課長、小川高齢者支援担当係長、村山高齢者支援担当係長 桜井介護保険担当係長、長田介護保険担当係長、 金子丸子健康福祉課高齢者支援係長、内田武石健康福祉課高齢者支援係長 羽毛田真田健康福祉課高齢者支援担当係長 中村行政改革推進室長、西沢行政改革推進係長、他行政改革推進室2名 |
| 6 | 公開・非公開等の別 | 公開 |
| 7 | 傍聴者 | 0人 記者 0人 |
| 8 | 会議概要作成年月日 | 平成25年7月5日 |
| 協 議 事 項 等 | | |
| 1 | 開 会 | (中村行政改革推進室長) |
| 2 | チームリーダーあいさつ | (山浦チームリーダー) 以下、チームリーダーを「T L」、副チームリーダーを「S T L」 |
| 3 | 議 事 | |
| | (1) 前回会議録の確認 | ・修正なく承認 |
| | (2) 前回会議の回答保留分について | ア 「高齢者福祉関係参考資料」中、高齢者福祉センター費4,399万円とあり、「事業概要シート」ではH23年度高齢者福祉センター事業費は3,039万円とあるが、その違いは何か。 (事務局)4,399万円の内訳には、「上田市高齢者福祉センター」、「真田老人福祉センター」及び「武石老人福祉センター」の事業費が含まれている。また、「丸子老人福祉センター」分については、上田市社会福祉協議会への補助金となるため、「高齢者生きがいづくり事業費」に含まれる。なお、上田市高齢者福祉センター事業費3,039万円には、修繕費(489千円)は含まれていない。 イ 高齢者福祉センターの耐震化について (事務局)「上田市高齢者福祉センター」は昭和56年建設で、建築基準法改正後の施設のため、耐震化が必要とされる施設の対象にはなっていないが、他のセンターは、それ以前の建設のため、耐震化が必要かどうか診断調査の必要な施設である。 |
| | (3) 評価対象事業の説明 | ア 生きがい対応型デイサービス(以下、「生きがいデイ」)について ・資料に沿い、村山高齢者支援担当係長から事業概要及び事前質問に対する回答を併せて説明 (T L) ただいま一通りご説明いただいた。質問等あればお願いしたい。 (委員) 生きがいデイは、要介護認定を受けていない方が対象であるため、介護予防等事前の学 |

習等も必要と思うが、制度の工夫はできないか。

(事務局) 生きがいデイ事業の内容については、市町村の裁量に委ねられる部分も多いので、具体的な内容を見直すことは可能であり、今後検討が必要になると考えている。

(委員) 利用者は減少傾向とあるが、市としてその理由をどのように考えているか。

(事務局) 軽度であっても介護認定を受ける方が増えていることが要因のひとつと思う。

(委員) 事業自体あまり市民が知らないのではないか。市民に対する周知を積極的に行う必要があると思うが。

(事務局) 平成12年度に介護保険が導入された当初、それまでデイサービスを利用していた方が必ずしも介護保険の対象にはならず、デイサービスを利用できなくなったという事情もある中で「生きがいデイ」事業が始まった経過があるが、時代の経過とともに事業の形態も少しずつ変えていくことも必要なため、今後は、地域で気軽に立ち寄れる談話室のような事業に移行していく必要もあると考えている。

(委員) 事業が実施されている場所のほとんどが委託先の施設で、高齢者が自宅に閉じこもりがちになることから回避させるという観点からずれている感じを受けるが。

(事務局) それまでのデイサービスを行っていた施設で生きがいデイ事業を実施した経過から、現在、事業を行っているのは施設が多くなっているが、生きがいデイに求められるものが閉じこもり対策や談話室などに移ってきているとすれば、事業内容を変えていかなければならないと考えている。

(委員) 事業が実施されている施設は、私が住む地区から遠い。遠方で、また車を所有していない人もいるなど、行きたくも行かれないため閉じこもることもある。

地域包括支援センターでも生きがいデイ同様の取組を実施しているが、地域包括支援センターを中心として取り組む方法はどうか。国県からの補助金にしばられてしまうのか。

(事務局) 生きがいデイ事業は、国からの補助金は受けていない。

(委員) 事業内容を変えることは難しいのか。

(事務局) 事業内容を変えていくことはできるが、高齢者が気軽に立ち寄れる談話室等の設置は、地域が中心となって進めて行かれればと考えている。

談話室等のサロン事業は地域など身近な場所で行われるのが理想で、多ければ多いほど良いと思う。しかし、生きがいデイ事業として実施すると、介護保険会計ではないため、実施すればするほど市の単独財源からの支出が増えてしまう。サロン事業としては、国の補助を受けられる事業形態もあり、行政だけでなくNPO法人、自治会等の地域の団体もサロン事業を行うことで事業展開していきたいというのがこのところの考え方。

事業全体として見直す時期にきていると思う。

また、地域包括ケアシステムとして、高齢者が地域で自立した生活を営めるよう、医療、介護、予防、生活支援、住まいの5つの視点で、包括的かつ継続的に取組が行われるシステムを、日常生活圏域ごと、適切に提供できる体制の構築も必要であろうと考えている。

(委員) 自宅に閉じこもりがちの高齢の方のために、身近に集まる場所があれば気軽に外に出られ、また、高齢の方の状況も地域の方が分かるよう、地元でいきいきサロンという場を昨年作った。身近な地域で気軽に来られるというところが好評で参加者も多い。

また、取組を続けることで地域に浸透していくことになったが、一方、徐々に当初の熱意が薄れてきてしまうなど、取組を継続させるにはそれなりの労力も必要なため、例えば、他地域で同様な取組をしている方たちとのネットワークが築け、お互いに相談できる場があればいいのではないかい。また、このような取組に対する支援もあるとありがたい。

(委員) そのように活動が活発な地域もあり、そこでは様々な情報が交わされ、問題を抱えている方は地域包括支援センターの相談につなげられることもある。行政では手の届かない部分に地

域の力が届いているということで、これからはこのようなことが必要ではないかと思う。

(委員) 地域での活動ということだが、自治会が活動しているのか。

(委員) 自治会が活動している地域も、有志が活動している地域もある。

(委員) 生きがいデイの活動内容によっては、施設以外で行うこともあるのか。

(事務局) 事業によっては外へ出かけたりすることもあり、内容に応じて場所は変わる。

(委員) 談話室のような場所は、各自治会全てにあって利用できれば良いと思うがどうか。

(事務局) 健康推進員が中心になり、サロンの場づくりを行っているところもあると聞いている。今年度から「介護予防日常生活支援総合事業」を実施しているが、その中でサロンの支援を検討していきたいと考えている。

(委員) JA信州うえだ農協でも、地域で気軽に集える「ふれあい広場」という取組を行っているが、行政だけでなく民間の力も借りながら事業個所を増やしていけばいいのではないか。

丸子地域の自治会では「災害時要援護者登録制度」に関連し、「支え合いマップ」を公民館関係者や健康推進委員等に協力してもらいながら作成した。災害に備える意味でも参考になる取組と思う。

(委員) サロン事業を自治会単位で積極的に行っている地区もある。生きがいデイの事業自体見直す必要があると思う。

(委員) 生きがいを感じて生活ができていて高齢者の方がいる一方で、外出するのが嫌だという方も今後増えていくように思う。そのような方が積極的に外出できるような対策がこれからは必要だと思う。

外出したがる人がどの程度いるのか行政で把握はしているか。そのような方への対策の議論がもっと必要だと思うが。

(事務局) 正確な人数までは把握していないが、要介護認定に至らない方のための事業が生きがいデイとなっている。

また、65才以上の方に(介護予防のための)基本チェックリストを送付し、家に閉じこもりがちになりそうな方については介護予防等の案内もしているところ。しかし、案内をしてもなかなか外出につながらないという方については、地域包括支援センターが中心となり、個別にアプローチする等の対応をしている。

サロン事業は多ければいいと考えているが、各自治会のサロン事業全てへの助成はなかなか難しい。市が助成するには一定のルールも必要となるため、先進地区を視察するなどし、助成のルールを検討している。

閉じこもりがちの方の数については、ある程度把握はしているので、次回、回答したい。

(委員) 高齢者世帯については把握されていると思うが、例えば、長年連れ添った老夫婦が、配偶者を亡くした際のショックに対するケア等も必要だと思う。引きこもりになる前の対策も考える必要があると思う。

(委員) 家に閉じこもりがちの方については、民生委員や地域包括支援センターの手助けが必要。また、会話が大切で、触れ合って会話をすることが生きがいになると思うが、人によっては苦痛になることもある。地域で幅広い年齢層が集まる機会があると、会話もでき、無理に声を掛けなくても集まることのできるのではないか。

(委員) 現在、福寿クラブの会長に就いているが、会員が減少してきている。その対策として6年ほど前から公民館などでお茶を飲んで、話をする「お茶飲みサロン」というものを企画している。単位クラブが開催するもので、開催について補助金を福寿クラブから出すもの。現在は、クラブ会員のみだが今後広げていこうと考えている。

また、これから団塊の世代が高齢者となってくるが、多くの人数がうつ病になるとの新

聞記事も見たが、引きこもりにつながるとも言えるのでそのための対策が必要と思う。

また、方向性は同じと思うが、地域包括支援センター、社会福祉協議会、民生委員等それぞれが個別に動いている感があるので、更なる連携が必要と思う。

(委員) 生きがいデイの利用者数が減っている一方で、介護予防事業は増えているのか。介護保険事業との関係はどうか。

(事務局) 介護予防事業の参加人数は増えている。要支援1の方は市内1,800人程いるが、本来は自立を目指すための区分になるはずが、ほとんどの方が要介護1・2となってしまうことを見ると介護予防が進んでいないとも言える。例えば、要支援1・2の方がいる事業所に通っていて自立となった場合、その後その事業所に通えなくなってしまうこともある。

しかし、生活の中で課題を見つけ実現させてあげるための介護予防事業に移行してきているので、これにより要介護者数を減らせるような取組として考えている。

また、生きがいデイは、より身近な所で、介護保険の対象にならない方を対象としていたが、現在、見直す時期に来ていると思う。これからの高齢化社会をイメージし、どういったところにどういったものがあれば安心して地域で暮らせるか、地域包括ケアシステムの構築の実現に向け、見直しを考えている。

(STL) 時代の変化とともに、引きこもり対策としての生きがいデイの使命は薄れてきているように思うし、本当に生きがいが見出せているかどうか疑問があった。今後を見据え、地域力によりサロン事業やふれあい事業等に移行していく必要があると思う。

また、ある方にとっては家にいることが快適であり、問題としていない場合もあるが、出る術がなく困っている方の対策を、地域力を生かす中で活性化していけたらいいのではないか。

(TL) この事業についてはこれまでとし、次の事業に移ることとしたい。

イ 在宅介護リフレッシュ事業について

・資料に沿い、村山高齢者支援担当係長から事業概要及び事前質問に対する回答を併せて説明

(委員) 遠方へ行くこともあるようだが、かえって疲れてしまうのではないか。また、同じ方の参加が多いように思うが。

(委員) 行先については希望を募るのか。

(事務局) 事業委託先の社会福祉協議会で企画・運営しているものだが、行先の要望を聞いて計画している。

(委員) 以前は県内が多かったが、日頃は行かれない所へ行ってもらいたいという思いもあるのか。

(事務局) 行先については、要望を聞きながら社会福祉協議会とも協議していきたい。

(委員) 私の場合は、自分の時間があるほうがリフレッシュできると感じる。介護者の孤立を解消する意味では良いと思うが、介護している方が集まり、悩みを話し合いリフレッシュできる場がある方が効果的と思う。

(委員) 私は、男性介護者の会にも入っているが、お茶を飲みながら好きな事を話し、息抜きしている。会社を辞めて両親の介護をし、その後、嫁の両親の介護もするようになった若い男性がいるが、その方に話し合いの場への参加を呼び掛けたりもしている。

(委員) 旅行に参加するために本人を施設へ預けようとも、タイミングが悪く預けることが出来ないこともあるので、受け入れ態勢の整備も必要。また、旅行に行くことに対して家族の理解も得づらい状況もあるが、行政としてもっと大勢の方が参加しやすくなるよう検討してもらいたい。

- (事務局) 参加者が固定している実態もあり、また、リフレッシュ事業に参加できない方に対しては相談事業も行っているの、他の事業も含めてPRする必要があると思う。
- (委員) 個人的には、介護に疲れてしまいとても旅行に行く気にならない、自由になりたい、自由な時間がほしいというのが本音だと思う。
- (事務局) 参考までだが、過去に、家族介護支援事業のおむつ購入助成金が10万円から7万5千円に引き下げられた経緯があり、その代わりにリフレッシュ事業が作られた。旅行ということのみに限定せずリフレッシュ事業としての視点からも議論していただければありがたい。
- (委員) 子育てをしている方には「子育て広場」があるが、同様に介護している方にも、例えば、高齢者福祉センターに介護者同士で話し合える場、相談できる場があればいいと思う。「ここへ来れば介護のことを知ることができる」といった疑問を解消できる場があればありがたいのではないかと。
- (委員) 地域包括支援センターの中で、そのようなスペースは考えられないか。
- (事務局) スペースが不足し難しいと思われるが、今後の話として、複合型施設のような場で検討できるかもしれない。
- (委員) 地域包括支援センター、社会福祉協議会や高齢者介護課へ相談に行く時は、切羽詰まった状況であることが多い。悩みが無くても立ち寄れる「カフェ」のような場所があれば良いと思う。民生委員としても、そういった場所で色々な話が聞け、専門の方や行政に相談もできる場があればありがたいと思う。
- (委員) 在宅介護者が本人も連れ、寄れる施設となると、それなりの設備も必要で、予算的にも難しい問題だと思うが。
- (委員) リフレッシュ事業の内容は検討すべきと思う。
また、相談ができ、交流できれば、リフレッシュできると思うので、例えば、街中の喫茶店で高齢者が割引を受けられる制度を考えてみてはどうか。旅行自体はいいと思うが、単に旅行に行き、参加者同士で会話もないようでは目的に合っていないと思う。
- (T L) リフレッシュ事業の中で、旅行が一番の事業なのか。
- (事務局) 現在はそうになっている。
- (委員) 温泉利用券を配り、自分が行きたいときに行かれるという方法もいいのではないかと。施設に預けられないから参加できないということも聞くので、そのようなこともリフレッシュ事業の一環として考えていくことも必要だと思う。
- (委員) 在宅介護者にとってリフレッシュの仕方はそれぞれ違うと思うが、リフレッシュ事業の要望についてアンケートを取ったことはあるか。現在は、旅行を実施しているが、参加者が固定し、参加人数も減ってきている中で、介護者の希望を聞いたほうが良いと思うが。
- (事務局) どのような方法で介護者を支援できるかの議論が必要だと思う。また、高齢者福祉センターは、個人で行って楽しめる場になっていないとも言えるので、ここでのご意見も参考にしたい。
- (T L) リフレッシュでき、また介護を頑張れるようになれるかどうか。悩みを聞いてもらうだけでも気持ちが晴れる場合もある。類似事業の「なのはな」の取組についても、拡充やPRすることも必要と思う。
- (STL) 悩みを語り、共有することが大事なことで、旅行で一部の方はリフレッシュできているのも事実。また、自由な時間がほしいという声も多い。介護している方の体調が不良の際に、急だが預かってもらえるところがあると嬉しいという声も聞く。ただ、「ショートステイ」を利用する際には、2～3か月前から予約をしないと利用できない実態がある。介護保険外で、自費で小規模のデイサービス等で宿泊する「ナイトケア」というサービスも

あり、自分の体調が悪い時などタイムリーに対応してくれる。そのような事業に補助等の支援はできないものか検討してほしい。

(T L) 本日は時間となったため、これまでとしたい。

(3) 次回の開催日程について

・第5回 平成25年8月8日(木)午後1時30分から

4 閉 会